

高等学校・地域における日本語指導・支援に関するヒアリング

埼玉県立吹上秋桜高等学校

報告者 青木典子（非常勤）

1 学校・団体の概要

学校・団体名	埼玉県立吹上秋桜高等学校
制度上の特徴	学校の場合 課程（ 昼夜開講二部制定時制 制 ） 学科（ 単位制総合学 科 ） 単位履修制度 2学期制 春秋2回の入学の機会 （ ） 団体の場合 主な事業内容 （ ） 規模（所属スタッフ人数など） （ ）
住所	埼玉県鴻巣市前砂 907-1
代表・連絡先	小川 隆 048- 548-5811
ウェブサイト等	https://www.shuo-h.spec.ed.jp

2 指導・支援対象の生徒について

- (1) 人数 12人
- (2) 言語文化背景 中国語、タガログ語、ドイツ語、英語、フランス語、ウルドゥー語、ポルトガル語
- (3) 滞日期間 日本生まれ～数か月前の入国
- (4) 来日理由（在留資格も含めて）親の就労や企業、日本人国籍のため滞在国で高校進学ができない、二重国籍所有のため生徒自身が選択して、

3 指導・支援体制について

- (1) 外国人生徒等の教育／支援に携わっている方の指導・支援内容・立場・人数
日本語の非常勤・日本語支援員（兼務）1名
- (2) 組織内・外の指導・支援の仕組み・組織
管理職・担任・教科担当と支援員の連携、
学校設定科目（日本語で単位習得）

4 ご報告くださる取り組みについて

目的

- (1) 生徒達の努力・経過を分かる形で、生徒、保護者、学校に示していく。
- (2) 生徒の日本語力と理解度を現場に伝えていき、対応を考えていく。
- (3) 海外をバックグラウンドに持つ生徒、外国人生徒が多文化共生を理解し（知り）、共に共生しやすい環境を生徒達を作っていくようにする。
- (4) ロールモデルから、日本での経験、苦労、努力などを学び、将来への過程、可能性、自身の特長（個性）に気づく機会を持たせる。

(2) 取り組み 実施期間、内容、

- 1) 学校設定科目＝「日本語理解」週2時間 2単位 2年、

東京学芸大学先端教育人材育成推進機構 外国人児童生徒教育推進ユニット（ユニットC）
文部科学省委託「高等学校における日本語指導体制の充実に関する調査研究」事業
各生徒の高校での学習目的と学習スタイルを把握し、支援方法を検討する。

校内日本語検定 7年

易しい日本語（担当生徒の日本語レベルにあわせて）に書き換え、国語の単元学習を行う
5年。

2) 多文化共生理解のための講演会・懇談会 5年

3) 海外をバックグラウンドに持つ大学院生から経験やチャレンジを聞く1年

(3) 成果と課題

1) 退学する生徒、定期試験を欠席する生徒が減った。日本語を学ぶことが、生徒の自由時間の自助努力だけで終わらなくなった。生徒自身が何を求めて高校に在学するのかを明確にすることで支援の方法・量に工夫しやすくなった。生徒、学校に生徒の日本語力向上・現在のレベル（進捗状況）を示しやすくなった。日本語がわからない、漢字やカタカナ・ひらがなが書けない状態の生徒が黒板の書き写しだけをする教科への出席が減った。授業内で生徒自身でできる・学べることが増えた。自助努力だけだったことが単位としてみとめられるようになった。

課題：学校には来ているが、日本語力が低いまま向上心がなく、日本語を身に付ける気持ちが特でないの生徒への対応。ほとんど日本語ができない状態で入学した生徒が、日本語レベルが上がるまでの日本語指導とそれまでの教科学習の対応。

2) 生徒の意識調査も5年分蓄積され、学校の傾向を把握できている。年々、講師との懇談人数が増え、時間も長くなり、生徒の率直な意見も出てきている。海外をバックグラウンドにもつ生徒が1度に集まり講師や仲間と話したり、相談できる機会、日本人生徒を交えての懇談会では、教室とは違う交わりが見られる。

課題：1年次に全生徒で受講したことが、高校3年間の生活や人間関係に生かされていることを確認するの難しく、理想的には、パート2的な学習の機会があるとよい。

4) 不登校を経験した生徒や学習に成果がだせないと感じている生徒、海外をバックグラウンドに持つ生徒にとっても共感しやすい。実際に経験し、努力し、大学院まで進んだ人から、直接話を聞いたことで生徒達が努力の先をイメージしやすくなった。ロールモデルとして生徒によい刺激になっている。進学が決まり、自身が母校のロールモデルになると講演会の講師を申し出ている生徒がいる。

課題→1年に2つの講演会を新年度が始まってから、新たに入れていただくようお願いするのは、苦労がある。学校や現場に無理を強いているのではないか。支援員は、年度雇用、立場上、次年度の計画に参加できない。